



第 88 号
平成 23 年
3 月 発行

東日本大震災に遭遇す

社会福祉法人りんさく福祉会

理事長 須田 混

平成二十三年三月十一日、午後いつものように私は診療を始めていた。突然、新規に替えたばかりの携帯電話が、アラームがなると共に地震です、地震です、との発信が音高く診療室に響いた。今までの携帯では経験の無いことで、新しい携帯の誤作動と思い、さらに診療を続けるや、一瞬、地鳴りと共に床やカルテやフィルムの棚が渦を巻くような感じで動き始めた。その揺れは波動のごとく揺れ動き、体自身が捻られるような恐怖を覚えた。机上のもの、棚と言う棚は全て倒れ、医療器具も散乱しその状態は凄まじいものであった。すぐさま、外来患者の退避、デイケアの利用者は職員の機転で、庭のテニスコートに誘導、入院患者は看護婦の対応で事なきを得、職員も含め全員無事であったことは何よりであったと、現在も安堵の思いを強くしているところである。

余震が続くも、当院が一段落した中で、テレビ、ラジオの情報で想定外の津波が太平洋沿岸に襲来しているとの事。介護施設「望洋荘」にての状況を把握すべく電話するも繋がらず、やつのこと携帯電話でのやり取りで、入所者や職員は全員無事であることの確認が取れてほっと胸を撫で下ろしたものでした。しかしその中の話にて、高台にある望洋荘から眺望できる鳴き砂で有名な美しい豊間の海岸が恐ろしいまでの引き潮と共に、大きな津波が再三に亘って押し寄せ、住宅を飲み込み、車が押し流され、多くの建物、施設が破壊されるのを目の当たりにし恐怖を感じたとの事。と同時に当地区の緊急避難場所に指定されており、豊間地区の多くの方々が約二百余人来所された。夕方になり最終的には百五十人が残

られ、宿泊することになった。入所者定員八十人のうち、病院に一名、診療所に一名入院していて、残り七十八名、ショートステイに七名いたが、急ぎ職員が送迎の対応にて帰宅させショートステイの方は二名のみ残り、地震当日の夜を迎えた。翌日には、緊急避難者には行政の指導の元に市内の指定避難場所に移動をお願いした。とにかく職員も含めての二百五十余人の食事、宿泊の対応を緊急用備蓄してある予備の食品の活用や地域の支援の下、厨房の職員も含め積極的に対応を図ったとの事であるが、大変な苦勞だった事と思います。本当にお疲れ様でした。

その日から、停電、水道管の破裂にて給水無し、液化ガスの供給断、等々のライフラインが絶たれた状況での生活。約一週間ローソクの灯のもとに、地震や津波の被害を受けた職員も一丸となって想像外の難局を乗り切ったことは称賛されてもいいでしょう。七十八名の入所者、後から増えた一名を加えた三名のショートステイの方、計八十一名に対して望洋荘としては家族の了解を得ながら、又、ご家族の支援を受け次のような対策を取りました。八名が自宅での待機。十四名が須田医院にデイケア室、リハビリの部屋を使つての避難。さらに、PEG(経皮的経管胃栄養)を装置されている方、臨牀的に重症の方々十二名が病棟に入院。五十余人を職員が多くの知恵を出し合い、ユニットの再編成を行いながらの懸命な対応であった。又、四月上旬までに元の体制に戻すべく、施設内の設備の復旧を図ると共に、自宅へ帰られた方、避難されている方の早期帰荘準備を職員全員が一致団結して頑張ったことは素晴らしいことだと思っております。しかしこれも地域の方々、行政も含め、いち早く駆けつけてくださった多くのボランティアの方々のお蔭であったと只々感謝の気持ちで一杯です。紙面をお借りして御礼を申し上げます。

最後になりますが、この混乱の中、避難先とはいえ、須田医院で青木アサヨさんの百歳の賀寿のお祝いが出来たのは幸いなことでした。地元の新聞にも明るい話題として取り上げていただきました。青木さん益々健康で長生きをお願いいたします。

東日本大震災

「その時私は……」

看護師 遠藤 騎子

三月十一日は休みで、朝から自宅に居た。大地震の際には、余りの揺れにビックリしてどうしたら良いのか分からず、愛犬を抱き、家の外の洗濯乾し場まで逃げてしゃがみ込んでいた。揺れている時間は長く感じられたが、家から飛び出して、外にしゃがんでいたのは私だけだった。近所の人は誰も外には出ていなかった。揺れが収まり、家の中でテレビを見ていると、父が心配して来てくれた。道路が歪み、陥没しているので、家に居ると云われたので、テレビを見ながらじっとしていた。

テレビでは東京の地震の様子が繰り返し映されているだけだったので、いわきの沿岸の津波被害は頭にも浮かばなかった。翌日は出勤日であり、道路の状況が不安だったので、職場に電話するも通話中。何度かけても話し中なので、上司の家へ電話するも留守電の状態。取りあえず、職場へと思いつたり着いたら、望洋荘の廊下は津波から避難した人達で一杯になっていた。

避難した人達の中を歩いていると声を掛けられた。「のりちゃん」と。以前一緒に病院で働いていた同僚だった。家は全て流されて昨日はここで一晩明かしたとの事だった。私は、かつての同僚に何と言え良いのか分からず、「そうだったの」としか言えなかった。何と声を掛けたら良かったの

だろうか？

又、先日、卒業した看護学校から手紙が届いた。クラスメートの一人が津波の犠牲になり亡くなったという知らせだった。私よりも十歳も若かつたクラスメート。子供と一緒に犠牲になったとの事。やり残した事が沢山あり、さぞ、無念だったと思う。私は老人ホームで働いているので、若い人が災害で命を失うということ事態、想像したことすら無かった。今回の災害を経験して、自分ですべきことは、やらねばならないという心情になった。悔いを残さない人生にしなければと思っている。

看護師 鈴木 信子

当日私は仕事をしていました。今までに経験した事のない大きな揺れでした。時間もとても長く、ただ事ではない、もしかしたら建物ごと崩れ落ちてしまうのでは。この瞬間で自分の人生が終わってしまふのではと、その場を動くことが出来ず不安だけが頭の中を駆けめぐりました。

三月の日が暮れるのは早く、たちまち周りはず暗闇。職場が高台で避難所になっていた為、次々と人が集まり「家が流された。女房が見つからない。」赤ちゃんの泣き声。ロウソクの炎。災害直後からライフラインが止まり、情報が全く入らず不安を募らしていたが、目の当たりの光景が現実かと目を疑うばかりであった。翌日、次々に入ってくる災害の情報「未曾有の災害」の状況を始

めて聴きました。

しばらくして、全国から支援物資が届きました。この時、心から人のやさしさを思い、深く感謝しました。このような災害は二度とあつてはならないが、もしどこかで起きたら恩返しをしなくてはと痛感しました。現在福島県は、原発という目に見えない脅威に曝されています。今願うことは、十年、二十年後この国を担うであろう子供達に不幸なことが起きないことを切に願うばかりである。

事務職 森 博之

私は、三月十一日に今まで体験したことのない地震に遭遇しました。最初は、この地震によりライフラインが全て止まり、テレビ等の情報を確認することが出来なかった事もあり、一週間も経てば、それなりの日常に戻るのではないかとどこか楽観的に見ているところが有りました。

しかし、一旦自宅に戻りテレビでこの地震の内外の被害状況を見た時、余りの現実離れした状況に言葉が出ませんでした。幸い私の家族、親戚などは、身体も家も大きな被害が無く、その面では大分気持ちを楽にしてくれました。

今回のこの震災に遭い、ライフラインの大切さを改めて感じると共に、全国の支援物資を送って下さった方々、ボランティアで手伝いに来て下さった方々に感謝の気持ちを強く持ったことです。今後、天災がどこかで起きた時には、今までのよう

に無関心でいるのではなく、自分なりに出来ることをやり、少しでも被災地の方々の役に立つことが出来るように努力したいと改めて思いました。

介護士 永沢 幸一

先ずは、甚大な被害を受けられた方々が、いち早く復興されることを心より祈らずにはおられません。

当日は、職場に勤務していた折の出来事でした。ご利用者様の居室に訪室した矢先に、あの巨大な地震があり、揺れの余りの大きさと長さに、このまま倒壊してしまうのかと「死」の恐怖にかられました。まさに晴天の霹靂でした。しばらくして、水は出ないし停電。情報が得られない不安の中、避難の方々が来られて、「家も全部流された明日からどうしよう」との報を聞き、事の重大さを身にしみて実感いたしました。その中でお互い励まし合いながら一夜を職場で過ごしました。コップ一杯の水で歯を磨き、うがい、そして歯ブラシとコップを洗う姿の中に、今までの当たり前の事が何よりも貴重であると言うことを気付かされたような気が致します。

この震災からまだそれほど日時は経っていませんし、原発の問題等課題は山積状態にありますがいわきの合言葉「がんばっぺいわき」の強い心が有れば必ず打開出来ると確信しております。共に頑張ります！

介護士 草野 千奈

私は、望洋荘のスタッフ四名とユニットケアの研修の為、福島市にいました。地震が来たのは丁度、利用者様の好きな事、好きな物等について話し合いをしている時でした。初めはいつもの地震かと軽い感じに思っていました。しかし、揺れは弱まるどころか次第に強くなり、私は隣に座っていたスタッフに声を掛け、テーブルの下に潜りました。強い揺れはどのぐらい続いたのかは分かりませんが、数十秒が数十分にも感じました。その間ずっと「大丈夫、大丈夫。」と声を出し続けました。一緒に潜っていたスタッフも私に一生懸命声を掛けてくれ、その声に励まされながらジッと揺れが収まるのを待ちました。

揺れが落ち着いた後、会場スタッフの指示に従いながら外に出ました。研修はそこで終了し、帰途につきました。車で福島市内を走ると沢山の人が、雪の降る中、外で不安な表情をしています。道路も至る所が通行止めで、自宅に着いたのは研修会場から五時間後でした。

翌日、職場に出勤し他のスタッフと協力して、自分の出来ることをしました。職場に残っていたスタッフも疲れているはずなのに一生懸命仕事をし、後から加わった私の心配もしてくれました。

今回の震災を経験し、又同じような地震や災害があつた時には、何事も皆で協力し、自分は何が出来るのかを真剣に考え、行動を起こしたいと思っています。

介護士 國分 奈保美

地震があつた時は、私は夜勤だったので自宅に居ました。布団に潜り込み、皿が割れたり、物が落ちたりの音により一層恐怖心は高まりながらも、じつと耐え続けていました。凄く長い時間揺れていたように感じ、収まって窓を開けると、外には逃げ出した沢山の人がおりました。経験外の地震で呆然自失の状況で、TVを取りあえず点けましたが、きつと耳には入らず、ボーンとしていたのだと思います。

仕事に向かわなければと車を出しましたが、道路は水浸しでした。こんな所まで津波が来たんだという現実を受け止められず、そのまま海沿いを走り続けました。遅刻をしようという気持ちがあるのか、ただ冷静な判断が出来ていなかったからなのか今もって分かりません。



3月11日の震災当日は、地域の方々が数多く避難され、不安な夜を迎えました。津波で家族が目の前で流されてしまった方、大怪我をされ命からがら避難された方まさに地獄図のようでした。

介護士 箱崎 直子

地震を感じた時、私は入浴介助にあたっていた。「地震だね。」と呑気に話した直後、激しく長い揺れが襲い、利用者様に「大丈夫ですよ。」と声を掛けながら、車椅子を押さえることが精一杯だった。隣のホールからは様々な物が落下して壊れる音がし、脱衣場のベッドは大きく移動、浴槽の湯は揺れによって溢れ出し、隣のホールまで流れ出ていた。これが現実なのか信じられない思いで私は唯々声を掛け続け、揺れが収まるのを祈っていた。幸いにも、利用者様、スタッフ共に怪我はなく、本当にほっとした。

その後は津波、度重なる余震で近隣の方々が避難をして来られ、望洋荘から見える海に沢山の瓦礫が漂っているのを目の当たりにし、この地震の恐ろしさに身が竦んだ事を覚えている。停電、断水はその後も続き、蟬燭と懐中電灯の明かりの中で、今後への不安を抱えていたのは私だけではなく、利用者様もスタッフも皆同じだったと思う。

それからは被災と避難によりスタッフ数の確保が困難な中、残ったスタッフで連携して職務にあたった。不安な気持ちに変わりはなかったが、支え合い、協力し合うことで、気持ちを保つことが出来たのだと思う。沢山の支援物資を運んで下さった方々、ガソリン不足の中、通って下さったボランティアの方々。泊まり込みで働いてくれたスタッフ。今回の震災で失ったものも多いが、その分、人

の気持ちの温かさや感謝をする気持ちの大切さも同時に学んだ。普通の生活がどれほど有り難いか、身に染みて感じた。

原発や余震等、未だ不安を抱えての生活ではあるが、利用者様の安心、安全、笑顔を守るために自分に出来ることは何か。今回の経験を踏まえ、常に考えながら行動することで、自分自身の成長に繋がれば幸いと思っている。

介護士 手塚 裕美

あの日、私は夜勤に行く準備をしていた、娘と家に二人きりだった。部屋で準備をしていると突然携帯の緊急地震速報が鳴り響き、家が揺れ始めた。直感的に危険だと感じた私は、すぐさまリビングにいた娘の元へ走った。次第に揺れが強まり、このままでは家が壊れてしまうんじゃないかというぐらになった。私は娘と炬燵の中に潜り、炬燵の脚につかまって必死で耐えた。ことばでは言い表せない恐怖感だった。人生で経験したことのない揺れに襲われ、もしかしたら死んでしまうのではないかと思った。そうなのもおかしい状況であった。

地震がある程度収まったのを確認してテレビを点けてみると、沿岸部に大津波警報が出ていた。まさかあんなに大きな津波が来るなんて予想もしていなかった私は、娘に急がされて高台にある実家に避難することにした。その際、小さい頃にお世話になったお隣のおばあさんを車に載せて

逃げた。実家に着く頃には、津波はもう下の橋の所まで迫って来ていた。高台から津波が押し寄せた後の町を見た時には涙も出なかった。何も無かった。何も考えられなかった。ただ、目を大きく見開いて、呆然としているだけだった。

介護士 大森 健司

三月十一日、あの時私は夜勤の為の準備をしていました。夜勤に就く前に入浴を習慣にしており、入浴後に地震が起きました。最初は地震が来たと思うぐらいの弱々しさでしたが、徐々に強さを増し、近くのタンスをとっさに押さえる事しか出来ずにいました。収まりかけた頃、外に出て家を見てみると、悲惨な光景でした。

余震もある程度落ち着き、家は家族に任せ、私は勤務の途につきました。いつものルートで職場に向かいました。仕事になるのか、これからどうなるのかという不安は勿論ありましたが、職場の情報も知りたく、急いで向かいました。

途中、沼の内のセブンイレブン前の交差点まで来ると、消防の方に「この先、津波で流されてしまったから。」と高久方面への迂回路へ誘導されました。時間がずれていたらどうなっていたかという思いが胸に強く押し寄せました。

いつもより三十分程遅く着いた時、駐車場から見た海は黒く、色々な物が散乱している状態でした。それから、長い夜勤が始まり、長い一日が続くのでした。

介護士 広瀬 美香

テレビの画面から突然、緊急地震速報の警報音。すると同時に今まで体験したことのない激しい揺れ。パリンパリンと食器棚からはグラス等が飛び出してくる。愛犬チャッピーも余りの恐怖でブルブル震えてすり寄ってきた。2〜3分は揺れていたか？ただ、居間のソファに座ってチャッピーを抱きかかえながら呆然としているだけ。何も出来ないというか、今、何が起きて、これからどうすれば良いのかという判断が出来なかった。三十分位して少し気持ちが落ち着いていた頃、娘の下校時間であることに気がついた。急いで学校に向かえに行く途中の道路は土砂崩れが生じていた。何とか迂回をして学校にたどり着くと黒山の山だかり。娘を見つけ出し無事自宅へ。少しすると母も自宅にたどり着き、やっと家族全員が揃いホッとひと安心。改めてこの時、家族一緒にいるだけで、こんなにも心強いものなのかと、家族の絆、家族の大切さを実感した次第である。

夜明けを迎え、食料を持って望洋荘へ。そこには想像を絶するような過酷な状況が待っていたのだ・・・。

介護士 蛭田 ゆかり

その日、私は職員四名とサンパレス福島の四階で一日研修を行っていた。そして、二時四十六分。最初はいつものたいたことのない揺れだと思い、軽い気持ちでいたが一向に収まる気配が無く、一

段と強さを増していった。長テーブルの下に隠れるも、テーブルが倒れそうになり、泣きながらテーブルの脚をつかみ、早い収束を願っていた。正直なところ、ニュージーランドの地震のように崩れて死ぬのだろうと思った。その時は本当に自分の事で精一杯で何も考えられなかった。隣で一人の職員さんが「大丈夫だよ。」と何度も声を掛けてくれて、一人だけの研修でなく本当によかったと思つた。みんなが居てくれて、とても心強かつた。

帰りの車中では、家族の安否を確認したり、施設の心配をしていた。利用者様の無事が確認できた時は、皆、一安心で早くいわきに帰りたく強く思つた。約六時間かけていわきに帰り、体育館に避難していた母、祖母の顔を見たら、安心したのだろうか大粒の涙がこぼれ落ちた。その日は余震も続き、又、施設の事も気になり一睡も出来なかった。

もう二度とこのような災害が起きませんように。

介護士 村瀬 智宏

三月十一日の東日本大震災時、私はインフルエンザに感染していた為、出勤停止中でした。熱もあつたため、布団に横になつていた時に地震が起きました。最初は寝たまま様子を見ていたが、今までにない揺れにすぐに起き、グラグラ倒れそうになっている食器棚を押さえていました。が、壁に大きくヒビが入つたという妻の叫び声が聞こえ

たので、そちらの部屋に向かいました。二人ともパニック状態で、脚は震えていました。家が古いため、倒壊しては大変と外に出ました。周りの家の瓦が崩れ落ちるのが見えました。

揺れが一旦収まって、すぐに思つたのは、帰宅時間の子供二人の事でした。余震が続き生きた心地がしませんでした。子供達が無事帰宅し、今度は大津波警報の発令です。施設が心配になり電話するも全く繋がりました。そうこうしている内に、家屋の倒壊が心配の為、実家に避難をしました。

落ち着いてから感じたことは、色々な災害が起きたらどうするかということを考えておく必要があると言うことです。もちろん非常時に必要な物品等の備えも含めて。又、どう冷静に行動するかでした。



震災 5 日目頃から、各地よりたくさんの支援物資を戴きました。震災当初は物流が止まり、業者や小売店が閉店しており様々の物資が不足している時でありました。本当に有難くみんなで涙を流しました。

介護士 草野 由香

私は永崎ユニットの入浴介助中でした。地震が起きた時、初めはすぐに収まるだろうと思っていました。徐々に揺れが大きくなり、入浴中の利用者様を支えるだけで精一杯でした。地震が収まり、何が起きているのか極めて戸惑いましたが、一緒に入浴介助をしていた職員と協力して、入浴中だった利用者様をお風呂場から誘導しようとした。その時、事務職員とショートユニット職員が応援に駆けつけてくれました。応援の職員の姿を見たときは、安心感と心強さを強く感じました。入浴中だった利用者様を取りあえずショートユニットに誘導、すぐに四倉ユニットに戻り、ユニット職員と協力して利用者様を離床させホールへ、この間無我夢中でした。

今までにない経験下の緊急時の中、職員が慌てることなく協力して、利用者様の安全を一番に考え行動出来たことは凄い事だと思いました。今回の体験から思ったことは、停電の中テレビも見られず、ラジオも聞きにくいという情報が少ないことは大変に不安を大きくすると思った。又、いざという時の為、懐中電灯やロウソクなどを備えておく必要性を感じた。

今後は地震だけでなく、その他の災害時にも利用者様を安全に避難誘導するにはどのように行動するかなど、職員同士で話し合い訓練して行かなければならないと思っています。

生活相談員 小田 典昭

私はあの大地震を、豊間海岸沿いにある歯医者診療を終えた入所者を迎えに行く途中で体験した。信号待ちをしていると、車がぐらぐら揺れ始め、道路沿いにある住宅の塀が倒れ、川を跨ぐ橋は上下に動く。頭上の信号機や電線も激しく揺れている。ラジオは地震速報と大津波警報を発信している。その状況は今まで全く経験したことのないものだった。

長い揺れが収まると、私は一目散に歯医者に向かった。その少し後にやって来る惨事など想像もしなかった。今思えば、その時は恐怖というよりも、早く入所者を迎えに行かなければと焦っていた気がする。幸いにも、その入所者の方と私は無事に施設に戻ることができた。

あの地震・津波の後、豊間の景色は激変していた。住宅や車などが流され、瓦礫で埋め尽くされていた。津波に吞まれた光景は悲惨としか言いようがない。その光景を呆然と見つめる自分がいる一方で、急に背筋の冷たくなる自分もいた。あの時、もう少し時間が遅かったら・・・と。

最後になりましたが、この震災で被害に遭われた方々にお見舞い申し上げますとともに、無念にも命を亡くされた方々のご冥福をお祈りいたします。

介護士 幸田 真由美

休みの日で、家で子供がもうすぐ帰ってくる時

間だなーとテレビを観ていました。すると突然画面が地震速報に変わり、外に出るとまもなく地震が来ました。今まで経験したことがない揺れが始まり、立っている事も出来ない程の長くて大きな揺れに恐怖を感じました。

揺れが収まるとすぐに、子供が心配になり、車で学校に迎えに行き家に戻りました。家に着くや否や、消防団から「津波が来るぞ、すぐに高台に逃げろ」との声に何も持たずに再度車に乗り、平方面に走り出しました。橋の途中で川から上がってくる津波を見て、恐怖を感じながらも子供を守らなくてはの一心でした。その日から避難所の生活がしばらく続きました。

管理栄養士 伊沢 真喜子

震災当日、私は休みで出かけており、家族は全員、自宅におりました。大津波警報が出ていることを外出先で知り、自宅は海に面しているので、一番に家族は無事に逃げられたかと、不安で一杯でした。家族の無事が確認できたのが地震発生から約一時間後、実際に家族と会えたのが約三時間後でした。父が 自宅の近くまで行くとしたが、瓦礫で行けずに、携帯で写真を撮ったものの言葉に、悲しさは込み上げてきたものの、家族は良く逃げ切ってくれたという安堵感もあり、胸がいつぱいでした。

職場からは家族と会う前に連絡があり、家族

と会えてからで良いので来て欲しいとのことでした。しかし、かなり動揺しており、当日は行けませんでした。翌日早朝に職場に着くと、多くの方が避難をしており、廊下が一面、人で埋まっていました。

施設長より災害時用の保存食を皆に渡したと伝えられ、食べるものが保存してあり本当に良かったと思いました。しかし、内容が軽食であり、もう少し食べ応えのある内容にしないと、利用者様がすぐに弱ってしまうと今回実感しました。今後は、今回保存食を提供した経験を元にして、もう少し保存する食品の内容を工夫していきたいと思っています。

介護主任 石上 阿希子

仕事が半日で十三時頃施設を出て、ドンキホーテで買い物をしている最中にグラグラと揺れがあった。その揺れが徐々に大きくなり、すぐにカーポートを端に寄せ外に出た。その時、自分の身体がとても重いので後ろを振り返ると誰かが私の上着に掴まっていた。掴まらないと歩けないくらいのもとも強い揺れだった。外ではキヤーキヤーと大声があり、みんな地面に座り込んでいた。誰かがワシネグを見て震度6と教えてくれた。

揺れが止まった時点で車に乗り、すぐに実家（高久）に寄ると、父が外に出ていて不安な表情で「大きかったな」と言った。その後、すぐ義姉が大声で津波警報が出たので藤間中学校に避難する

よと叫んだ。義姉に両親の事を頼み、私は望洋荘に行くことを伝えた。

望洋荘へ向かう途中、自宅に寄り犬を車に乗せて向かった。が、弁天川の橋にトラックが陥没した道路にはまって動けない状態だった。消防団員に通行止めと言われ、望洋荘行きを断念せざるをえなかった。引き返し中学校へ避難しようとしたが、かねまんの所で渋滞となり、空き地に車を停めて八幡神社に避難した。とても寒い日で雪が降ってきた。誰かの津波が来たぞ！の声で神社の入り口から滑津川を見ると土手よりも高く津波が押し寄せて進んでいた。

十八時半頃実家に行き、家族全員で中央台の公園に避難し車中泊をした。とても長い日に感じた。私は津波の恐ろしさを知っていたわけではなく、望洋荘に行くために回り道をして、薄磯方面を通っていたらと思うと背筋が寒くなる。

大地震の後は津波を思うこと。そして安全な場所に避難することを第一に考えることを今回の教訓としたい。

介護士 新妻 茉依

三月十一日、金曜日二時四十六分、その時私は、一般浴二名の入浴介助中でした。地震の起きた際、利用者様の洗体介助を行っており、「利用者様の安全を守らなければならない」という思いで胸がいっぱいになり、必死に利用者様が洗体椅子から落ちないように支えていました。もう一名



震災から約1週間電気もガスも止まり、ガソリン式の発電機を調達しました。しかし、10時間使用するためには、20リットルのガソリンが必要であり、ガソリンが容易に手に入らない中では充分に使用する事が出来ない状態でした。

の利用者様は浴槽に入っていた状態にあり、激しい揺れに驚いた様子で浴槽より上がるうとしましたが、危険だと思い、浴槽内の手すりに揺れが落ち着くまで掴まって頂きました。しばらくすると揺れが落ち着いてきましたので、すぐに利用者様達を浴槽から上げ、車椅子で安全な場所へ移動しました。その後、初めて大津波が襲来したことを知り、利用者様の安全を守るため、その日は施設に泊まりました。その日の夕方より停電、断水状態となり、緊急事態に備え、利用者様全員をホールで見守りする事となりました。

今回の東日本大震災で、普段私達が行っている、蛇口をひねれば水が、スイッチを入れれば明かりが灯るといふ当たり前の事の有り難さを実感しました。今後、この経験を生かし、水、電気、をガス等を大切にし、少しでも無駄にしないように努めていきたいと思っています。

地震関連特別紙面

ロナルド・レーガン【大統領】、鈴木善幸【総理大臣】、岡本太郎【彫刻家】、藤山一郎【歌手】、三原 脩【野球】さんなどがこの年に生まれています。

四月に予定していた行事は「東日本大震災」の影響により全て中止させていただきます。

※なお、その時の状況により、出来る範囲でのレクリエーションを行って行きたいと思っております。

F	(
A	0
X	2
	4
	6

須田醫院

100歳の誕生日を迎え、ケーキを見て喜ぶアサヨさん

アサヨさんは明治44年3月25日生まれ。自宅は豊岡だが、昨年7月から同施設に入所し生活を送っている。普段の生活も自分で元気に過ごす。

などによる100歳寿のお祝いは東日本大震災のため中止となった。

誕生会は、開店している菓子店があるところをう

らないけど、本当にありがとう、ありがとう」と、喜んでいた。プレゼントもあり、うれしそうな笑顔で受け取っていた。ともに避難してきた入所者

「おめでと
う」とお祝い
の言葉が送ら
れた。

しており、折り紙や読書などをするのが好きという。

ほかの入所者13人とともに、15日から同病院に避難している。県や市

ジョで知った施設職員が
ケーキを用意。ケーキに
は「アサヨさん、誕生日
おめでとう」と書かれ、
それを見たアサヨさんは
「何て言っているかわか

この日はまた、被災に
来初めて入浴することが
でき、アサヨさんやほか
の入所者たちもみなさっ
ぱりして気持ち良さそう
な笑顔だった。